

審査の結果の要旨

氏名 鈴木 隆之

鈴木隆之氏の論文「建築のフィクティブな性質を持つ可能性についての研究～20世紀以降の建築、小説、映画の比較考察を通して」は、近現代の建築史を、新しい視点から見直すことで、埋もれていた別の可能性を照らし出そうとするものである。

本論文は全体が5章からなる。第1章「背景と目的」と第2章「手法」が「本論」を形成する。小説や映画はフィクションと呼ばれ、現実を重視する建築とは異質に見えるが、これらが性格を共有することがあったことを、既往研究に基づき論証し、それらを比較検討するための手法を提案する。「本論」を形成する第3章「座標上の評価指標」と第4章「分析」で、20世紀の建築、小説、映画を、共通の座標軸に位置付け、その同時代性がどう現れたかを明らかにする。第5章「まとめと発展」は「結論」であり、同時代性を持った建築、小説、映画の性格と構造が論述されている。

鈴木氏の研究は、建築と小説、映画の同時代性を検証することで、建築の現実的な側面以外の、フィクティブな側面を描き出している。それによれば、建築のフィクティブな力が大きく浮かび上がったのは、1910～20年代及び1960～70年代であった。前者の場合、表現主義や未来派といった新しい芸術思潮が現れた時期であり、革命の時代でもあった。後者は経済や効率一辺倒のモダニズムに対する批判が顕在化した時代で、ポストモダンとも呼ばれる。想像力を駆使して新たな建築を構想しようという試みが多く見られ、それらは確かに、小説や映画と共通する性格を持っていた。そしてそれらは、技術や経済といった現実的側面ばかりが強調されるモダニズムとは異なる、もう一つのモダニズムの系譜があったことの証拠ともなっている。この新たな系譜の確かな描出に、審査員一同は新しい建築史の発見を見た。

ポストモダンが一過性の流行であったかのごとくとらえられがちな今日では、

再び建築の現実的な側面ばかりが強調されるようになった。しかし鈴木氏は、困難な現実と直掩する時代においてこそ、建築のフィクティブな力が求められるとして、近現代の建築史のフィクティブな系譜を、今日に甦らせることの必要を論じている。

「表現主義論争」やポストモダンをめぐる多くの言説や研究に根拠を得て論理の構築を行いながら、それを今日へとつなげるべき系譜として描き出すことに成功しており、これによって近現代の建築史は、新たな側面を見せることになった。そしてその側面は、今後の建築のあり方をめぐる議論にも、一つの大きな論拠を提供することになろう。この研究の意義の大きさを、審査員一同は高く評価した。

よって本論文は博士(工学)の学位請求論文として合格と認められる。